

「ゆい……可愛い。ここ、こんなになってる」

耳元で囁く低い声。

「逃げちゃダメ……。お前は俺のものなんだから」

肌に触れる男の人の、長くてしなやかな指。私は彼の愛撫に溶かされて、体も心もひとつになっていく……。彼は私の……。

ピ。ピ。ピ。ピ！ピ。ピ。ピ。ピ！

「わああ！」

部屋中に響き渡る大音量の目覚ましの音で、私は勢いよくベッドから起き上がった。目覚ましのセットを止めると、ふうと小さく息を吐く。

「……また、濡れてる」

下半身の違和感。それは昨日今日始まったことではなかった。

下半身……詳しくいうと、女の子の大事なところから蜜が漏れて、下着を汚す不快感。ぐっしりと濡れた下着が肌に張り付く感覚。

夢の中の出来事が身体と頭の中に残っていて、激しい自己嫌悪に陥る。

「シャワー浴びよ……」

私は一週間前から、えっちな夢に悩まされていた。欲求不満……というわ

けではないと思う。だけど、毎夜えつちな夢を見て、毎朝下着を濡らした自分に自己嫌悪するのだ。

夢の内容は出来るだけ思い出さないようにしてるけど、完全に忘れることは出来なくて、ふとした瞬間に思い出しては恥ずかしさに頭を抱えなくなる。私の肌を撫でる手つき、耳元で囁く低い声。彼の愛撫と言葉に、身体を暴かれていく……。

「ああああ！　しっかりしろ、私！」

お風呂上がりの私は、恥ずかしさを振り切るように勢いよくベッドシートと脱ぎたての衣類を洗濯機に放り込んだ。そして素早く、洗濯のスタートボタンを押す。

ちよっと高かったけど、乾燥機付きの洗濯機を購入して良かった。これで

授業を終えて、夕方に帰宅するころには私の痴態を洗い流して、清潔な状態に戻っているはずだ。

洗面所で髪を乾かしながら、ちらりと時計を確認する。朝ごはんを抜けば、十分に間に合う時間だ。

「ちゃっちゃとメイクまでやっちゃおう」

そう呟き、ドライヤーのスイッチを切った瞬間——カチャンと玄関の開錠音が響いた。

「ゆいー。準備間に合いそう？」

低く通るその声を聞いた瞬間、なぜかさつきまで濡れていた下腹部がキュ

ンと小さく疼き、私は思わず肩を跳ねさせた。

まるで自分の部屋のように慣れた様子でやってきたのは、幼馴染の蓮（れん）だった。

彼の名前は、深山 蓮（みやま れん）。どこか人間離れした、すっきりと整った美しい顔立ち。細身のスタイルにシンプルな服をサラッと着こなす彼は大学でも目を引く存在だが、普段はどこか冷ややかでぶっきらぼうだ。

そんな彼が隣の部屋に住む、私の幼馴染。地元でも家が隣同士だったのに、大学進学のために一人暮らしを始めてからも、変わらず隣の部屋に住んでいる。

ずぼらな私のことを心配して、母が「ゆいが部屋で倒れてないか、時々見に行つてあげてくれる？」なんて合鍵まで渡すものだから、蓮は今日まで律儀に毎朝私の様子を見に来てくれる。正直、お母さんが2人いるようで有難いような、情けないような、複雑な気分だ。

「洗濯してるの？ 時間ないのに」

「いいんだよ、乾燥機付きなんだから」

ゴウンゴウンと回る洗濯機を横目で見ながら、随分と余裕ですねと言いたげにリビングへ向かう蓮。私も洗面所を出て、彼の後ろを歩く。

「てか、一人暮らしなのに毎日洗濯してんの？ ある程度溜まってからでよくない？」

「いいの！ あんたは私のお母さんか！」

思わずツッコむと、蓮は「はいはい、そーですか」と他人事のように返す。
むむ……、相変わらず何を考えているのか分からないやつだ。

普段は口数が少なく冷ややかな反応しかないのに、私と二人きりの時はこうやって小言を言ってくる。蓮の外面しか知らない友達が「蓮くんって、クールでカッコよくて王子様みたいだね」と言うと、私は思わず否定したくなる。いやいや、この人すっごく喋りますけど！？」と。

なんて、私が難しい顔をしていたせいか、蓮は何かあったのかと訝しんだ様子でこちらを見ていた。ローテーブルの上にはラップに包まれた、手作りのおにぎりが二つ。

「……なにこれ」

「作った」

でしようね、と心の中でツツコみながらおにぎりをひとつ手に取る。握りたてなのか、ほかほかと温かい。

「どうせ、朝飯抜くつもりだったんでしょ？」

見透かしたような言葉に、私はドキツとする。食べやすいように、普通より小さめに握られたおにぎり。

「そっちが鮭で、これが梅」

「……梅干しは」

「もちろん、はちみつ梅にしてあるよ。ゆい、しそ梅苦手だもんね」

「ありがとう……」

訂正します。お母さんみたいなんて言ったけど、完全にお母さんです。本当にありがとうございました。

なんて、わちゃわちゃしつつ支度を済ませて、私たちは部屋を出た。学生用のマンションから最寄りの駅までは徒歩十分。少しゆっくりめに歩いて、予定の電車には余裕で間に合うはずだ。

私はちよつと行儀が悪いけど、蓮の作ってくれたおにぎりを頬張りながら歩く。蓮は当たり前のように車道側を歩いてくれている。けれど、時折チラリと私の口元に落ちる彼の視線になぜか熱を感じて、キュンと胸の奥がくすぐったくなる。

「な、なに？」

「ん……」

恥ずかしそうに尋ねると、蓮はその場所を教えるようにトントンと人差し指で自分の口端を叩く。

「……あ、ご飯粒ついてた？」

恋愛的な何かと早とちりしたことに恥ずかしさを覚えつつ、私は自分の口端についた米粒を取る。

「もう、それなら早く教えてよ。いつからついてたの……？」

そう言った瞬間、私の指先についた米粒をパクっと食べた。いや、私の指先ごと食べられた。

……え？

ポカンとした表情で固まる私をよそに、蓮は私の指先を咥えながら、じつとこちらを見つめる。その捕食者のような視線に、恥ずかしくて顔がカーツ

と熱くなる。

「ななな、なにやってんの!？」

テンパって思わず声を上げると、蓮はようやく私の指から口を離した。ちゅ、と艶っぽい音がして、去り際に彼の舌先が私の指先を優しく撫で上げる。それが余計に私を恥ずかしくさせる。

「私の指なんか食べても美味しくないから！」

ごく当たり前のことを言う私の反応を見て、蓮は可笑しそうにくくつと笑う。

「お前って、本当面白いよな。ちよつとからかったただけだろ。そんなに怒ることないじゃん」

「いや、怒るから！　誰だって普通に怒るよ！？」

何なの、この人！　急に距離を詰めてきて怖いよー。

……だけど、怖い怖いと言いつつも実はドキッとしてる自分がいたりして……。だって、あの時の蓮の表情と、夢の中の彼が重なって見えたから。

……うう、ダメだ。あの夢のことを思い出すと、お腹の奥がじゅんとする。

しかも、幼馴染と私の夢（きつと私の欲求不満が見せた妄想）の中の彼は重ねるなんて、蓮にすごく失礼だ。落ち着け私。このくらいの悪ふざけで慌てるな私。

心の中ですーはーと深呼吸をした後、私は真剣な表情で蓮を見つめる。

「……今回は許してあげる。けど、こんなこと私以外の人にしちゃダメだよ？」

言いたいことが言えてすっきりした私は、再び駅の方へと歩き出す。ぽかんとしている蓮を置いて、少し早歩きで歩く私は、その場で立ち尽くす彼が何を言っているのか気づかなかった。

「……他の奴になんて、するわけないじゃん」

夜、お風呂を済ませてベッドに入った私は、気がつくやうに淡い紫色の霧に包まれた夢の中にいた。何度も誘われた場所。何度も押し倒されたベッドの上。

「……またここに来ちゃった」

戸惑っていると、私を見つめる鋭い視線に体がビクッと反応する。まるで、小動物を狙うような捕食者の視線。

「だ、誰!？」

そこに誰かいるかなんて分かっているはずなのに、震える声で尋ねる。私の声を聞いて、霧の向こうにいた影がゆらりと揺れる。

そして、その姿がはつきりと分かった時、私は「あっ」と小さく声を上げた。だって、そこにいたのは……

「蓮……?」

大事な幼馴染だったから。

なぜ、蓮がこの夢の中にいるのか分からない。

私が彼を呼んだの？ いや違う、呼ばれたのは私の方。だって蓮はこの夢の主のように、妖艶な笑みを浮かべていたから。

「やっと寝た……。待ってたんだよ、ゆい」

少し嬉しさを含んだようなその声は、蓮そのものだったけど、現実の彼とは明らかに違っていた。人間離れたツノと尻尾。彼の上半身は逞しくも引き締まった胸板が露わになっていて、その目は獲物を見つめる獣のように光っている。

「っ……や、はなして、蓮……！」

「嫌だ。夢の中くらい、俺の好きにさせてよ。毎晩ここでお前を独り占めできるの、楽しみにしてるんだから」

現実の彼なら絶対口にしない、独占欲に満ちた言葉。蓮の大きな手が私の頬に触れれば、彼の綺麗な紫色の瞳に見つめられる。

……あれ？ 蓮の瞳って、こんな色してたっけ？

その直後、蓮は口づけをしてきた。それは触れるだけの優しいものではなくて、熱くぬるぬるしたものが、こちらの唇に割り入ってくる。

「ん、んん！？」

蓮の舌が私の口内で暴れまわる。私は彼の胸を押してどうにか離れようとするけど、びくともしない。蓮の舌は私の舌をくちゅと包み込んだり、口内の粘膜をたっぷりと舐め上げてきたりする。私の全てを奪い取るようなキス。熱くて、火傷しそうなほど情熱的で、キスだけでとろとろにされる。

「ん……ふう……っ」

蓮にしがみついて、与えられる刺激に必死で耐え続ける。それが終わる頃には私の頬はわけもわからず、涙に濡れていた。

「はあ、はあ……」

ゆっくと蓮の顔が離れていく。ふたりの唇の間を透明な唾液の橋が伝わ

り、とろりと切れた。その時の私はもう抵抗する意思もなく、くたりとベツドの上で横たわっていた。

そんな私を見下ろしながら、蓮は満足げな表情で自分の唇をペロリと舐める。その仕草が色っぽくて、私は息を整えながらぼんやりと彼を見つめていた。

（……あなた、本当に蓮なの？）

そう尋ねてしまえば簡単なのに、それが言えない。だってここは夢の中で、現実じゃないから。きつとここは私が作り上げたえっちな夢の世界で、現実の蓮は関係ないはずだ。

「……ねえ、ゆい。何か考えごとしてる？」

「あっ……」

蓮の手が優しく私の肌を撫でる。その手つきが妙にリアルで、夢と現実の境目があいまいになっていく……。

蓮は慣れた手つきで私のパジャマのボタンを外し、ズボンまで脱がせていった。彼の前で下着姿になってしまう。それが恥ずかしくて、私は隠すように身をよじろうとする。すると覆いかぶさっていた蓮は、片手で器用に私の両手首を掴み、頭の上で固定した。

「逃げちゃダメ。今夜もえっちなこといっぱいしようね」

そっと耳元で囁かれると、私の身体が蓮に主導権を明け渡したように、ふっと力が抜けた。

「は、い……」

彼の声は魔法みたいだ。蓮の声を聞くと、身体と心が言うことを聞かなきゃって素直になっちゃう……。

私の反応を見た蓮は、満足そうに両手の拘束を解いた。蓮の手のひらが、私の首元から胸、くびれと滑らせるように優しく撫でる。

「んっ、んう……」

そして、その手は私のいちばん敏感な場所で止まった。

「……ここ、ぷっくり腫れてるね」

「あ……っ♡」

下着越しに指先が触れただけで、身体がビクンと震える。蓮もそこが私の弱点だと知っていて、クスクスと笑いながら執拗にそこを責めてきた。

薄い布越しにコリコリと小さく円を描くように弄られ、ニチュ、ニチュと溢れ出た愛液が濡れた音を奏でる。

「ひう……っん♡ あ……っ♡ い、やあ……っ♡」

「下着越しでも分かるくらい、クリがおつきくなってる。ここ、俺が育ててあげたんだよ？」

蓮の嬉しそうな声。腫れたクリトリスを撫で回されるたび、おまんこが内側からじゅわっと潤んでしまう。愛液でぐちよぐちよに濡れた下着は肌にぴ

ったりと張り付き、ぷっくりと膨らんだ秘豆と花卉の形をくつきりと浮き彫りにしていた。

無意識にひくひくと甘く揺れる私の腰を見て、蓮はそっと耳元で囁く。

「ねえ、足開いて？」

恥ずかしさに首を振ると、ぐにっ♡と指の腹で強くクリトリスを押しつぶされた。

「ひぎっ♡♡」

「開け」

「あ……っ♡♡ はい……」

低く命令する声が頭に響き、私は抵抗をやめてそつと脚を開いた。待ち構えていた蓮の手のひらが、太ももの間に滑り込んでくる。

「ん、良い子だね……♡　ぷっくりと腫れたクリトリス、いっぱいなでなでしてあげるからね」

「あっあ……♡　あひ……♡♡」

人差し指と中指の二本でクリトリスを挟んで、くにくにと揉み解される。こんな気持ちよすぎて、恥ずかしいのに自分から腰を浮かせてへこへこと押し付けてしまう……♡♡

「あれ？　気持ちよすぎてどうでもよくなっちゃった？　クリトリス指で挟まれながら、腰へこへこ動かすの気持ちいいね」

「うん……っ♡ うん♡ 気持ちいい……あっ♡ 気持ちいいですう♡♡」
「ははっ、そっか。じゃあ、もっと気持ちよくしてあげる」

蓮は人差し指の爪先で、敏感なクリトリスをカリッと微かに引っかいた。

「お……っ♡♡」

その瞬間、私は背中を大きく反らせて、ビクンビクンと激しく絶頂した。
下着の意味なんて無いくらいぴったりと肌に張り付き、なおもおまんこからは愛液が溢れ出て止まらない。

「あーあ、クリ引っかかれただけでイッちゃったね」

「は、はひ……っ♡ イッちゃいましたあ……♡」

「ふふ、素直だね。いつものゆいも、これくらい素直だといいんだけど……」
「なります……♡ 素直になるから……っ だから♡」

（直接触って……♡♡）

そう言葉にしようとした瞬間に、蓮の大きな手が私の両目を優しく塞いだ。それと同時に、抗えないほどの強烈な眠気が頭を襲う。

「……だーめ、今夜は触ってあげない。そろそろ夜も更けてきたからまた明日、ね？」

おでこに優しくキスをされると同時に、私の意識は深い暗闇へと落ちていった。次に彼に会えるのは夢の世界か、それとも……。

ピ。ピ。ピ。ピ！

ピ。ピ。ピ。ピ！

ピ。ピ。……

朝を告げる目覚まし時計のアラームを止めると、私は大きくため息をついた。シーツがしっとり濡れて、下着が肌に張り付く嫌な感覚。それに加えて、今日はなんだか身体の奥がじんじんと熱っぽい。

「うう……なんで？ 私こんなにえっちな子じゃなかったはずなのに……」

物足りない。指先で甘く弄られただけで生殺しにされたような、しつこい疼きが身体の中に残っていた。いつも通り洗濯機を回して、シャワーを浴び

て着替えても一向にすつきりしない。

原因は分かっている。夢の相手が蓮だとはつきりしてしまったからだ。だけれど私だって、あの甘くいじわるな彼が現実の蓮本人だとは思っていない。

夢に出てくる人物は、自分の心の一部や隠れた欲望の象徴として現れるって聞いたことがある。だから、夢の中のあの淫らな蓮は、私の欲求不満が作り上げたただの妄想なのだろう。

「……だとしたら、余計に恥ずかしいんですけど」

きつとあと数分で、いつものように蓮が私を迎えにやってくる。小言を言いながら、また手作りの朝ごはんを用意してくれるはずだ。

その時、私はどんな顔をして彼を見ればいいんだろう。いつも通り、幼馴染のフリをして笑えるだろうか……。

「……ゆーいちゃんっ！ 俺の話聞いてる？」

大学の食堂。お昼ご飯を食べながらぼんやりしていた私は、頭の上から降ってきた声にハッと我に返った。一人で食べていたはずなのに、いつのまにか先輩が隣の席に腰かけてこちらを覗き込んでいる。

「あ、すみません。ちょっと、ぼーっとしてました」

「だよね。俺が話しかけても何にも反応無かったし、もしかして無視されてる？ って思っちゃった。でね、今度の休みなんだけど……」

先輩はこちらが返事をする間もなく、またべらべらと話を始める。

彼は同じ学部 of 秋山先輩。私は正直、距離感が近すぎる彼のことが苦手だった。派手な風貌と身勝手な性格、強すぎる香水の匂い。加えて片っ端から女の子を口説いているものだから、秋山先輩に対する印象は最悪だった。

今回のデートのお誘いだって、私が断ったところで他の女の子の所に行くはず。だから無難な言い訳と共に、少し申し訳なさそうな表情で断ることにした。

「……ごめんなさい。今度の休みは外せない用事が入ってて……」

「そうなんだ。じゃあ、その次の休みは？ 休日が無理なら、平日の夜でもいいけど。あ、今夜は空いてる？」

あれ？ おかしい。全然諦めてくれない。いつもならそれっぽい理由で断れ

ば、すぐに諦めてくれるのに。

「や、あの……それも無理で……」

「えー、なんで？ ゆいちゃんってさ、いつも予定が入ってるとか、忙しいって断るよね。いつも先輩の誘い断ってさ、悪いなって思わない？ たまには一緒に出掛けてくれてもいいんじゃないの？」

私に言い訳させないように早口で、グイグイと迫ってくる秋山先輩。顔は笑っているけれど、有無を言わせないプレッシャーに私はすっかり怖くなつて泣きそうになる。

（やだ……なにこの人。怖い……。助けて、蓮……！）

その時、背後から低く、聞き慣れた声が響いた。

「……何してるんですか？ 先輩」

「あ、蓮……」

怯えた表情の私を安心させるように蓮は優しく微笑むと、秋山先輩へ向き直った瞬間、氷のように冷やややかな瞳で見下ろした。

「ゆいに変なちよっかい出すなって……俺、前にも言いましたよね？ なのにまだ、まとりついてるんですか？」

「え……あ、いや……、一人だし、大丈夫かなうって……。はは……」

「大丈夫なわけないでしょう。今度ゆいに迫ったら、こっちもそれなりの対応をさせてもらうんで。そのつもりでいてください」

「はは……、は……、そっか……。ごめんごめん。……じゃ、ゆいちゃんばいばい……」

凄まじい気迫にすっかり青ざめた秋山先輩は、へらへらと取り繕うように笑いながら逃げるようにその場を後にした。蓮はその情けない背中が見えなくなるまで冷たく睨みつけると、短く息を吐いて私の隣に腰を下ろす。

「まったく、お前さ無防備すぎなんだよ。だからあんな変な奴に粘着されるの、わかってる？」

「わかってる。だから、気をつけてるつもりだよ。けど、ああやって絡んでくるんだもん……」

昨夜あんな淫らな夢を見てしまったせい、蓮の顔がまともに見られなく

て、私は胸元あたりに視線を落として俯いてしまう。

（蓮は私のことを本気で心配して助けてくれたのに、私の一方的な恥ずかしさで避けるなんて……私、最悪だ）

自分の不甲斐なさに落ち込んでいると、蓮がこちらの心を見透かしたように、低く静かな声で問いかけてきた。

「……ねえ、ゆい。朝から俺のこと避けてるでしょ？」

「え、いや……そんなつもりないけど……」

目を逸らしながら必死にはぐらかそうとする私に、蓮はぐっと顔を近づけてきた。吐息が触れそうなほどの距離。彼の綺麗な顔が目の前に迫り、心臓

が跳ね上がる。

「うそ。絶対、避けてる。普段のゆいなら、絶対噛みついてきてるでしょ。なのに、今はのらりくらり躲そうとしてる」

「うう……」

「ねえ、教えてよ。昨日までは普通だったじゃん。……俺、なんかした？」